

目で愛で食べる

影山 薫

登場人物

男
女

皿の乗ったテーブルを挟む、男と女。

音楽が流れる、二人は不自然な動きで階段を降り、動いてはとまり、動いてはとまり、窓を見た男は唐突に、

男 雨が、降ってきたようだ。

女は男とは反対の窓へと顔を近づける。

女 降ってないわ。

男 降っていますよ、小雨だけれど。

女 私には、見えないわ。

男は女の見る窓へ、女は男の見る窓へ振り返る

男 ほら、目を細めて、

女 目を細めて。

女は歩き、席に着く

男 空間に狙いを定める。

女 で、

男 視界に雨が入ってくる、降っているだろう。

男は女へ振り向くが、女は店員に注文をしている。

女 空間に狙いを定める？
男 何か、可笑しいかな。

女 いえ、理屈は抜きに行きましょうよ。(食事を始める)
男 私には、いつだって、理屈なんて在りはしないよ。

布巾で口を拭く男。女の皿には、手付かずの前菜
が残っており、店員は男の皿を下げ、去ろうとする。

女 すみません、これも下げて貰えますか？

男 ……ずっと、君に伝えようと思っていた事があるんだ。

女 何？

男 ……もう、君と食事は出来ない気がする。

女 嫌いになった？

男 見てもらえない、君が見えない。

女 どこが嫌いなのです？

男 君を否定するつもりは無いんだよ。嫌いとか、そう言う
問題では無いんだ。私は、心得ているつもりだ。

女 そんな風に善人ぶって、あなたはいつも、曖昧ね。

もつと判るように説明して頂戴。

男 私は、ただ、おいしく食事がしたいんだ。

女 私だって、おいしい食事がしたいわよ。

メインの皿が運ばれる、暫く食事に手を付ける二人。
男は、ハンバーグをフォークとナイフで切り崩し、
上品に口へ運ぶ。女は、フォークで、
付け合せを退け、ハンバーグだけを食べ続ける。

男 (窓の外へ目をやり) 雨、止んだ様だ。

女 おいしい。

男 どうして、食べようとしなない。

女 食べているわよ。

ハンバーグを食べる女の様子を見ている、男。

男 偏り過ぎていないか。
女 何にでも補えるわ、何だって。

男は、目の前の一輪の花を、手で潰す(様に見せる)。

女 何するの。可愛そうに。

男 解っているよ。(潰そうとしていた手を広げ)・・雨、
本当に、降っていたんだよ。

女 分ってるわ。

男 何を？

女 生きる為にそんなに必要な事？ 考える必要がある？

男 それなら物と同じだ。自分の研磨を全てに委ねて、

滑らかなオパールにでも、鋭い刃物にでもなるといふのか。

女 あら、オパールなら素敵だわ。

男 勿体無い。

女 面倒な人ね。

男 君は都合が良いな。どうして、そう残すんだい。

味わった事があつてのことなのか？ みっともない、

そんなに細かく切つてあるものまで、もう、ここに味は

無いよ、食べてみたら？

女 味の問題では無いのよ。みっともないのはあなたよ、

男の癖に、そんな細かな事に執着するなんて。わかったわ、

これで満足でしょう。

男 ええ、もう私は満腹ですよ。

女、カバンから、色取り取りのビタミン剤を

取り出し、ハンバーグの乗った皿にばら撒く。

女 栄養満点よ。

男 君の目は能無しか？

女 色取りだつて、(原色のビタミン剤の乗った皿を傾け)ほら、きれいでしょ。目に脳は無いわ。あなたは、いつも叫んでゐるのに、嘘ばかり。嘘は、大事な時の為に取っておくものよ。

女、ハンバーグを咀嚼して飲み込み、フォークで掻き集めた薬を喉に入れた。

男 君は普段、こんなものを食べて生きてゐるんだ。

女 体の必要とするものよ。

男 だから？

女 何？

男 生きる為に生きるのだから？

女 生きる為に食べるのよ。

男 だから、食べる為に食べるのではないのか？

食事を続ける二人、男は食事を済ませ、女の皿には、弄った付け合せが残る、が、フォークとナイフがフィニッシュを告げており、二人の皿が下げられる。

デザートが運ばれる。おいしそうに食べる女。

男 おいしいかい？

女 ええ。食べないの？

男 …君がおいしいのなら、あげるよ。

女 諦めるの？

男 わからない。けれど、君には、見えないのだから、私を見るモノも、私自身も、見ようとしなない。そして、私も、君の見るものが、解らなくなった。

女 見ていたわ、今もこうして目の前にいる、何を見せていないというの？

男 本当に？ けれど、食べなかった。君は、僕の言葉を、

嘘だと言った。そうして君は、食事を薬で補うように、きつと、私も、何かで補うのだろう。

女 話が違いわ。

男 同じ事だよ。：私は、君に出会って、君の、目に映るものを、君が見て来たものを、知りたいと思っていた。

女 あなたは変わってしまったのね。

男 私は、判ったんだ。嘘は、別れの為にあると。やはり、私は、君と、おいしく食事は出来ない。それでも、私は手を尽くした。それでは、おいしい食事を。

男は、汚れた白いナプキンを放り、席を立った。

完